

SPレコードと 蓄音機

荒川 泰藏

某月某日、米国や英国で集めたビンテージ・ラジオに混じって持ち帰った数台の蓄音機で、子ども達にSPレコードの演奏を聴かせると、不思議そうに眺めて「これって電気の線はどこにあるの」と覗き込む。「そんなのないよ」と返事すると、「ああ、電池で動いているのか」と自分で納得してしまふ。「それも違うな」と言つた。「ほな、なんで動くの?」「ゼンマン」「それって何?」である。もう「おじいさんの古時計」も家がない時代では無理もない。

毎月定期的に開催している「SAYAKAレコードサロン」を吹聴していると、東京のアマチュア無線家から、友人が横浜で蓄音機を集めていると知らせてくれた。早速、東京に出かけ案内してもらったが横浜市内のマンションにその「横浜蓄音機ミュージアム」なるものがあった。と言っても個人のコレクションである。

米国ビクター社のビクトロラ・クレテンザ、英国HMV社のHMV2003型、英国EMG社のEMGマークV-1型(アップライトグランド型)、米国フランスウィック社のフランスウィック・パナトロップ・コルデスなど、1925年から1930年ごろに製造された世界の最高級機種が並んでいるではないか。それだけでも凄いことだが、なんとそれが試聴できる動態保存とのことで、時間の許す範囲でその一部を試聴させてもらった。SPレコードという100年近い音の音源から、既にこの世にいない音楽家たちの演奏や歌声が、すぐ目の前に蘇るのには不思議でさえある。

大ホールやスタジアムで、これでもかと増幅した音を鼓膜が破れるかと思うほどの大音量で聞かせる音楽とは全く次元の違うものであり、SPレコードの溝に刻まれた小さな振幅を、針を通してサウンドボックスの振動板を震わせ、それをメガホンのよ

うなコニカル(円錐)型ホーン、ないしはエクスポーネンシャル(幾何級数)型ホーンを利用して拡声しているだけなので音量には限りがあつて、1人もしくは少人数で蓄音機と対峙して鑑賞するものではないかと思ふた。

それにしても蓄音機が発明されたのは僅か137年前の1877年、発明者エジソンが1888年に自分の声を録音したレコードが見つかったとニュースになったことがあつたが、それ以前の人の声は勿論、音楽家の歌声や楽団の演奏などは聞きたくても聞くことが出来ない。作曲家が残した楽譜を音楽家たちが再現していることを思えば、蓄音機が発明はなんと画期的なものであるうが。

米国ニュージャージー州のウエストオレンジにあるエジソンの博物館は、当時のエジソンの研究所や工場がそのまま残されていたが、ここで作られたエジソンのシリンドラー型蓄音機が100年以上の時を経て、今なおSAYAKAホールで当時の音楽を演奏しているのにはロマンを感じる。

